

# 六、文化と経済の施設

## (一) 学 校

教育は一応学校教育と社会教育に区別せられるが、両者が一体となつて推進せられるところにその効果は期待せられる。したがつて広く教育全般を語ろうとすれば、必ず社会教育の面に深く入らなくてはならぬがこゝでは熊野の教育を学校の立場から述べてゆきたいと思う。

義務教育としての本町の教育施設は第一、第二小学校と中学校であるが、その沿革を簡単にたどつてみたい。なおその中で目立っていると思われるものは巻末の年表に掲載してある。

熊野第一小学校の前身は明治七年（一八七四）八月西光寺習字教場を改めて発足した弘時館である。当時その衝にあつた人には戸長の佐々木祐四郎や同じく佐々木亮之輔等があり、寺小屋の師匠であつた梶山直人、猪野了心、世良兵左衛門らがこれに参劃した。同じような試みが各部落に見られその状況は次の表のようである。

これら各部落の学校はそれ／＼変遷があり、明治十四、五年（一八八一、二）頃には次のようになってい。明治十二年頃の就学状況は極めて低調で村役場議事録によれば戸長が戸籍簿から学齢者を書き抜き、そ

広島県教育八十年誌所載の広島県公立小学校表より抜萃（明治八年）

名 称	地 名	設立年	借 用		授業料	扶助金配布額
			公	有		
名 称	地 名	設立年	借	用	授業料	扶助金配布額
弘時館	熊野村中溝	明治七年	借	用	無	二八、五〇
誠心館	〃	〃	〃	〃	〃	二六、二〇
階梯社	熊野村萩原組	〃	〃	〃	〃	二九、〇〇
齊文社	熊野村新宮組	〃	〃	〃	〃	二七、五〇
必隣社	熊野村城之堀組	〃	〃	〃	〃	二〇、五〇
開云社	熊野村出来庭組	〃	〃	〃	〃	二一、六〇
精業社	熊野村吳地組	〃	〃	〃	〃	二三、五〇
教義館	平谷村	〃	〃	〃	〃	一七、五〇
翫学社	川角村	〃	〃	〃	〃	一八、二〇

## 川角小学校の記録に拠る

名 称	補助金	生徒数	明治十五年一月～六月	
			補助金	生徒数
新宮学校	三、〇二九	三四	四、六七六	六七
初神	二、四〇五	二七	二、四三三	三五
萩城	四、二七六	四八	三、四九〇	五〇
中溝	三、一一八	三五	三、五六〇	五一
出来庭	三、二九六	三七	三、二一一	四六
吳地	三、三一六	二六	四、四六七	四四
川角	二、一三八	二四	一、六七五	二四
平谷	三、二〇七	三六	三、二八〇	四七

年には、村会議の制が定まり学校経費を一村の負担とするようになった。（経費は十九年郡内一円を安芸小学区とし連合会によつて決定）同年教育令が公布され学齢を六才から十四才までとし、その期間少くとも十六ヶ月間は普通教育を受けることとなる。翌十三年に教育令改正、修業課程を小、中、高の三等に分け三ヶ年以上八ヶ年以下とし、やむを得ざる限り男女教室を同じくしないことにした。学務委員が公選されたのもこの年である。

熊野の小学校が漸く軌道に乗つて来たのは明治十九年の頃からである。この年に小学校令公布、尋常小学校四年を義務教育としたが、簡易科（修業年限三年）の代用

れをもつて学校世話役は各戸を廻り就学督励にあつたようである。（註）明治十五年下半期の川角村の学齢人員は四十三人（男二三、女二〇）で就学生徒二十六人（男二三、女三）、これでも当時の状況はわかる。なお十二

を認められ熊野簡易小学校（二十一年熊野尋常小学校と改称）が誕生した。すなわち出来庭、萩城、平谷、呉地学校を合併（平谷学校はこの年分離）し、新校舎も中溝字城に三百八十四坪を敷地とし、和洋折衷二階建瓦葺一棟（延八十坪）を三百五十四坪で建設した。当時の学科は読書、作文、習字、算術、体操で、生徒の学力を優等、尋常の二等に分け卒業の際これを証明した。熊野簡易小学校第一回の卒業生（二十二年三月十五日）は男三、女一であった。授業料は十九年四月には一人あたり二銭（十月の小学校授業料規則で五銭より五十銭となる）で、二十二年度は授業料収入は百五十円三十三銭五厘。こうして学校経費は生徒授業料と学区補助費をもつてまかなわれたわけである。就学状況については前にも述べたが、二十三年の熊野村の就学生徒数は男百八十三人、女十八人で未就学は男三百五十二人、女五百四十九人で、未就学の原因は地形上の障害（城之堀、萩原の東北部、初神）と経済上の問題であつたが、就学者は学業によく精励したようである。しかし就学率は年を追うてよくなり明治三十三年六七・〇四%（追分は七八・〇九%）三十六年八四・八五%（追分八三・三三%）三十九年には熊野、追分とも九九%を超えわが国初等教育前進の一つの縮図を示している。

第一小学校沿革誌より

年度	経費	卒業数
一九年	三七七、三六、八 <small>（四、八）</small>	
二〇年	三一五、七八、九	
二一年	三六五、一〇、八	男三 女一
二二年	三八七、一七、九	男一〇
二三年	三四七、五七、八	男二二 女一

備考 二十六年卒業生男二九、女二  
二十八年度は男三三、女五

室一棟、宿直室一棟）三十年には熊野尋常小学校に高等科が併置された。次の表は大正十三年追分小学校に高等科がおかれる頃までの両校の生徒の実態である。

三十三年に小学校令が改正され、尋常小学校四年、高等小学校二乃至四年となつた。四十年には三度小学校令改正、義務教育は六年に延長（高一、二を尋五、六とし高等科を二年とする）され、これが、今次教育

在学、卒業者数（第一、二小沿革誌）

年	熊野尋常高等小学校		追分尋常小学校	
	在学	卒業	在学	卒業
明治二十九年	三三三	三三三	一三三	一三三
三〇年	三三二	三三二	一三二	一三二
三一	三三一	三三一	一三一	一三一
三二	三三〇	三三〇	一二九	一二九
三三	三二九	三二九	一二八	一二八
三四	三二八	三二八	一二七	一二七
三五	三二七	三二七	一二六	一二六
三六	三二六	三二六	一二五	一二五
三七	三二五	三二五	一二四	一二四
三八	三二四	三二四	一二三	一二三
三九	三二三	三二三	一二二	一二二
四〇	三二二	三二二	一二一	一二一
四一	三二一	三二一	一二〇	一二〇
四二	三二〇	三二〇	一一九	一一九
四三	三一九	三一九	一一八	一一八
四四	三一八	三一八	一一七	一一七
四五	三一七	三一七	一一六	一一六
四六	三一六	三一六	一一五	一一五
四七	三一五	三一五	一一四	一一四
四八	三一四	三一四	一一三	一一三
四九	三一三	三一三	一一二	一一二
五〇	三一二	三一二	一一一	一一一
五一	三一	三一	一一〇	一一〇
五二	三〇	三〇	一〇九	一〇九
五三	二九	二九	一〇八	一〇八
五四	二八	二八	一〇七	一〇七
五五	二七	二七	一〇六	一〇六
五六	二六	二六	一〇五	一〇五
五七	二五	二五	一〇四	一〇四
五八	二四	二四	一〇三	一〇三
五九	二三	二三	一〇二	一〇二
六〇	二二	二二	一〇一	一〇一
六一	二一	二一	一〇〇	一〇〇
六二	二〇	二〇	九九	九九
六三	一九	一九	九八	九八
六四	一八	一八	九七	九七
六五	一七	一七	九六	九六
六六	一六	一六	九五	九五
六七	一五	一五	九四	九四
六八	一四	一四	九三	九三
六九	一三	一三	九二	九二
七〇	一二	一二	九一	九一
七一	一一	一一	九〇	九〇
七二	一〇	一〇	八九	八九
七三	九	九	八八	八八
七四	八	八	八七	八七
七五	七	七	八六	八六
七六	六	六	八五	八五
七七	五	五	八四	八四
七八	四	四	八三	八三
七九	三	三	八二	八二
八〇	二	二	八一	八一
八一	一	一	八〇	八〇
八二	〇	〇	七九	七九
八三	〇	〇	七八	七八
八四	〇	〇	七七	七七
八五	〇	〇	七六	七六
八六	〇	〇	七五	七五
八七	〇	〇	七四	七四
八八	〇	〇	七三	七三
八九	〇	〇	七二	七二
九〇	〇	〇	七一	七一

制度改革（六三制）まで持ち続けられるのである。この年熊野尋常高等小学校は榊山神社境内に移転した。（校地七百八十八坪、平屋建三棟、十二教室）

父兄と家庭との協調は学校教育発足と同時に進められたわけであろうし、明治二十年頃は各部落で幻燈会を開催した記録もあるが、これが組織化せられたものが教育後援会（大正十二年結成）であつた。

一方、大正十四年には婦徳（聖徳）高等女学校（猪野氏経営）と幼稚園（光教坊内）に創設せられ、翌年萩原区に熊野中学校（まもなく廃止）が開校したことは、熊野教育界に新しい光明を投じたものであつた。爾来婦徳高等女学校は二十五年の長い間、本町及び周辺の女子教育に貢献した功は偉大であると言わねばならぬ。

青年教育に関して学校の果たした役割は、先ず補習学校（明治三十年に熊野に補習科設置、大正九年追分に補習学科付設）であるが、ついで大正十五年青年訓練所令が公布せられ、小学校に併置した同訓練所は、本町青年教育の中心となり、昭和八年には湯沢県知事より表彰された。当時の青年の活躍は若人の本領を遺憾なく發揮し、体育や弁論にその成績は異彩を放つたものである。そして昭和十年今までの実業補習学校や青年訓練所は、熊野第一、第二青年学校に發展し（十九年に両校合併、二十年五月、熊野町昭和村学校組合立青年学校となる）第二次大戦の荒波を超えて、二十三年三月その幕を閉じる。そして戦後の青年教育は青年学級や自主的な団体である青年団等とおして、熊野町發展の推進体としたくましい歩みを続けているのである。

小学校の方は昭和六年、本庄村の平谷、川角部落合併とともに、本庄北（平谷）小学校を熊野尋常高等小学校に合せ、熊野第一（熊野）第二（追分）尋常高等小学校（十六年、国民学校）と改称した。なお戦時の教育こそ言うべきことは多いが、今はその総べてを省略したい。

こゝで特筆大書しておきたいことは筆の都熊野の特殊行事である第一回全国書画展覧会が昭和七年に開催されたことである。そして現在（三十二年）すでに二十五の齡を数え、毎年全国各地から一万数千点の作品が寄せられている。

戦後の教育は百八十度の転換をした。それは民主日本建設の原動力としての姿であつた。二十二年学制改革、これに伴つて新しく熊野中学校が第一小学校の仮校舎を借りて発足した。二十四年十二月には柳山神社境内（旧第一小敷地）に新校舎が落成、ついで二十七年四月には特別校舎、さらに三十年七月には講堂兼用の校舎一棟が建設された。この間の町当局ならびに町民の苦勞は真に血のにじむ思いであつた。また教育内容も戦後の混乱を脱皮し、現在着々とその充実を見、すでに中学卒業生千五百九十五人（三十一年度まで）で第二の熊野町民として力強い歩みを続けている。なお中学校の対外的行事としては毎年陸上、庭球、野球、

柔道、剣道、弁論大会等を開催し多彩であるが、筆都にふさわしい七夕競書（画）大会が二十六年七月にその第一回を開催され、年々盛況に向かつている。また二十三年に郷土誌筆の都を發刊、二十四年単元松喰虫を同じく刊行し、二十六年には松喰虫駆除の功により農林大臣から表彰されたことも記憶に新しいことである。

小学校の方も着々と施設内容を充実して今日に至つては、校舎の面では第一小学校は二十九年八月講堂落成、第二小学校は二十七年三月西校舎、三十年七月東校舎が落成して面目を一新した。また書道教育の振興の上で注目してよいものは第一小学校の才一回全国書道教育研究大会が二十六年に開催せられ（三十一年度より才二小と中学が参加）すでに七回を数え、全国各地から参集する人々によつて真摯な研究が続けられている。研究テーマや講師団等は次のとおりである。

回	年 度	研 究 テ ー マ	講 師	参加数
一	昭二十六年	国語科における書くことと地位	富山民彦、井上桂園、竹沢江東	二五〇
二	二十七年	書くことのガイダンス	豊道春海、上田桑鳩、竹沢、末田克巳	二七〇
三	二十八年	芸術教育としての書教育	富山、上田、宇野雪村、竹沢、末田	三四〇
四	二十九年	現場における諸問題（偏向について）	井島勉、宇野、竹沢、末田	二四〇
五	三十年	指導技術の分析的考察	今泉篤男、宇野、竹沢、末田	二七〇
六	三十一年	心的傾向と書表現の發展について	倉沢剛、宇野、竹沢、末田	二八〇
七	三十二年	技術指導とその評価について	山田栄、宇野、竹沢、末田	三五〇

才二小学校としても芸能関係としては特に図工科の充実に努力し、二十九、三十年の両度研究会を開催し、この面では以後三校連合の書道教育研究大会に及んでいる。

なお新学制の実施とともに、二十四年海田高校の定時制が婦徳高等女学校跡に設けられたが、三年間で廃止されたことも熊野教育史に附記してよいことであろう。

戦後を中心とした小、中学校生徒の卒業者数や歴代校長は次のとおりである。

卒業、在学数 (第一、二小、中、沿革誌)

年 度	学校		第一小	第二小	中	卒業学	
	在	卒				男	女
昭和元年	一四九	一三一	六七	五〇	二二		
五年	一三九	七一	七	三四	一七		
十年	一八〇	九八	一〇	三二	三〇		
十五年	一五〇	一〇八	一〇	三六	三三		
二十年	二〇二	一〇四	二	四〇	二八	四五	八
二十二年	一五〇			三五	四三	五二	三六
二十三年	一四九			三六	五〇	七二	七〇
二十四年	一四六			三四	五七	一〇〇	一〇七
二十五年	一三四			三一	五二	八〇	八八
二十六年	一七一			三一	五二	九七	七九
二十七年	二〇五			四一	五三	八一	八九
二十八年	一六二			三八	六〇	九〇	六六
二十九年	一六八			四五	六四	一〇九	八五
三十年	一八五			三八	六四	一二五	二四
三十一年					六四		
三十二年					六九		

歴代校長表 (第一、二小、中、沿革誌)

第一小学校		第二小学校	
校長	就任	校長	就任
松谷彌三郎	明二、八	津江本三藏	明三四、六
北村藤三郎	二四、九	山崎来一郎	三五、六
林虎之助	二七、七	菅田每次郎	四三、四
菅田每次郎	二九、二	荻野英雄	大二、四
山本惠一	四三、四	生田喜藏	昭一〇、四
藤本金次	四四、二	山崎次郎	一五、三
宝沢三郎	大八、四	佐々木高博	一七、五
児島義雄	一〇、四	山田効	一九、四
藤井忠	一三、四	河村忠夫	二四、四
大下新次郎	昭三、四	中村義雄	二六、四
矢吹喜幹	七、四	岡本春登	三一、四
佐々木高博	一九、四		
中村義雄	三一、四		
		岩崎喜一	昭二、四
		岡田勲	二八、四